

# 「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部  
創立10周年に寄せて

⑦

「なにを考えているんだ。はやすぎだ。私は計報を聞くや大声で叫んだ。二〇〇九年六月二十七日、五十三歳の若さで七恵さん(永田・旧姓佐々木)は逝った。

七恵さんが「五葉の鹿の若角をしるしとかさす」住田高校に入学したのは、一九七二年四月。「お願いします」と明るく朗らかな声とともに、ごく自然にグラウンドに立った。陸上競技部の顧問は教師歴二年目。指導者としても悲しいかな、人間としても未熟だった。

一年生の春。岩手県大会八百以て二位。東北大会への出場権を得る。表彰される選手の待機所で、迷顧問は怒鳴った。「なにを考えているんだ。あの走りは」。迷顧問は「競走は、優勝をめざし、前々とひたすら駆けろ」と持論とする。

七恵選手はほとんど殿(しんがり)を走り、ラスト百以て追い越しにかかり、ゴールした他の選手が疲れきっているのにケロリとしている。迷顧問はその走りが気に入らな

い。怒鳴った顧問も後には反省する。「七恵さんのスピード、相手と自分の力量、それを見極めたうえででの最善の走りだったのかも知れない」。しかし、そのころの未熟な教師は、「教師は自分の考えを生徒、選手におしつ

けてもかまわないエライ人間である」という錯覚に呪縛されていた。

二年生の新人戦県大会。八百以て優勝。三年生の県大会は二位。三重インターハイに出場した。全国には通用しなかった。

ひとつ心残りなことがある。七恵さんを気仙一

も泣かなかった。きょうだい七人の末っ子。家族のだれかが帰るまで家のなかで、じっと待っていた。忍耐力と持久力は生まれながらにしてそなわっていたのであろう。

高校時代の七恵さんはよく努力した。努力は裏切らない。確実に成長し、いつのまにか日本女

多少でも触れあった生徒が、華々しい活躍をする。それを耳目でとらえることはうれしいことだ。もちろん、そこまで至らなくとも、しっかりと生きていくのを目にし耳にしても、である。

すっかり生きる大人は、かつてしっかりと考えた生徒だ。七恵さんもよく考える生徒だった。もちろんいつでもどこでもよく考えたにちがいない。

ね真剣に考えた。そして未知の世界に挑戦した。私が新米教師なら、目の前の生徒は、努力し考え、鑿(のみ)で空に穴をあけようとするに決まっている。

ありがとう七恵さん。感謝の二文字に買かれて自分のいる。同時に「なにを考えているんだ。はやすぎだ」と大声で叫ぶ自分もいる。あきらめきれないのだ。まだ県全体の郷土紙物語の刊行像を描く。

【執筆者プロフイー ル】一九四七年、北上市生まれ。奥州市水沢区在住元高校教員。初任地住田高校で陸上競技部顧問。著書「岩手県の郷土紙物語」敗戦後発行の県中南部の郷土紙。現在、盛岡の郷土紙物語を執筆中。県北や沿岸の郷土紙物語の取りまとめも視野に入れ執筆準備中。岩手県全体の郷土紙物語の刊行像を描く。

## ありがとうとう七恵さん

奥州市水沢区 昆 憲 治

同駅伝などに起用しなかつたことだ。五ヶくらいの区間を走らせたかった。「はじめの女性ランナー七恵選手、ごぼう抜き長駆疾走」。沿道は沸きにわいたであらう。

あるとき七恵さんが陸上部の後輩に話していた。「赤ん坊のころ、柱に縛りつけられていた。で

子マラソン界のパイオニア的存在として活躍する。

一九八四年八月五日のロサンゼルスオリンピック女子マラソンに出場した。真夏の太陽が照りつける暑い日のレースとなつた。私は深夜のテレビ放映を観た、観た、応援した。ゼッケン「羽」が画面いっぱいに広がる。



1972年の住田高校運動会での「部対抗リレー」メンバー。右端が当時2年生の七恵さん、前列中央が筆者

# リレーエイ